

桜蔭俳話会 通信句会(第百九回 平成二十五年度春)

高得点句 自句自解

十点

④古書店の払はずに置く花の屑

増田 守

学生時代、大学図書館に籠もって勉強していた。昼休みには気分転換のために、神保町の古書街を散策した。これといった目的の本はなくとも、馴染みの何軒かに立ち寄った。高価な本を買う訳ではないから、店主の記憶にはなかったであろう。勝手に馴染みの店と思っただけである。でも、古書店の主人や従業員は叩きで本の埃を払う振りをして、貧乏学生を追い払うことはなかった。古書店の醸し出す空気に惹かれて店に入って来た、客でもない客を追い立てなかった店主ならば、店頭の小陳列台の上に吹き寄せられて来た花屑を無碍に払うことはないであろう。

九点

④船頭の櫓のなめらかや水温む

柏尾 のり子

友人と九州旅行をして、水郷柳川で川下りをした時の句です。川下りといっても、掘りなので、流れはほとんどありません。うららかな春の日でしたので、「どんこ舟」での観光は、余計にのんびりしたものでした。

③登り来て燼ひとりの余花の寺

荒木ツル子

桜の盛りも終る頃でした。散策の途中、ふと思ひ浮かんだお寺の桜に、もしやと行ってみました。まだ見られる程に残って居て、独り占めとばかりに何か得をした様な気分でした。

八点

①行春や置屋の残る路地の猫

藤本 友子

神楽坂は、にぎやかな本通りから一本横道に入ると、かつての花街の面影が残っていて、「見番」と呼ばれる置屋もあります。当時のはなやかさはなく、今はひっそりとしている街の所在なげな猫の様子を「行春」と取り合わせてみました。

新しき友の名告げり入園児

藤本 友子

親と祖父母の心配をよそに、入園するや新しい友達が出来た孫。うれしそうに友達の名を教えてくれる様子に、安堵した時のことを句にしました。

七点

① クレソンや水切りカゴの美しき水

古野 明美

やつと初夏らしい明るい日差しが部屋に満ちていた。いつものように台所に立ち野菜を洗う。ステンレスの水切りカゴに深い緑色のクレソンを放り込み、勢いよく水道の栓を捻り、流水でクレソンを洗う。水切りカゴの網目から、勢いよく四方へ水が迸り落ちる。その様子に、ふと、水が美しいと感じた。「水が美しい」、そう感じたのは、子供の頃以来であったように思う。遠い昔、蜷や田鱒を採って遊んでいた小川の水は底まで澄んで美しかった。キラキラと輝いていた。はるかなる日の透明で美しい水の思い出。しばし、クレソンの鮮やかな緑色とカゴから溢れ落ちる流水に見とれてから、ようやく水道の栓を閉めたのである。

① 髪切つてさららふわふわ春が来た

藤崎安紀子

今よりもう少し髪がふさふさしていた数年前に作った句です。長くなり、うつとうしくなった髪をばつさりカットしてもらい、美容室を出た時の爽快感をそのまま句にしてみました。文語調より口語調の方が更に爽快感が強まるかなと思いました。

春光のあまねし鯉の太りをり

佐渡谷秀一

五月の吟行会は、材木座の光明寺と海岸だった。光明寺は関東十八番壇林の筆頭とのことで山門からして堂々たる構え。本堂と開山堂を繋ぐ吹抜け廊下の背後に大池の庭園があり、陽光の降りそぐ水中に、鯉の群れが人影に近寄りもせず、時折、泥煙をあげ回避している。亀との共生はいうまでもない。

さへづりを森林浴の友として

藤本 友子

桜の名所である多摩森林科学園での句です。桜は既に見頃を過ぎていましたが、うぐいすや四十雀やその他の鳥の声が降ってくるようでした。まるで私たちを歓迎してくれているようで、とても癒され、そのまま句となりました。